

小児慢性特定疾患の治療研究事業（ぜんそく）

研究協力者 森川昭廣（群馬大学医学系研究科小児生体防御系）

A. 研究目的

小児慢性疾患のうち、ぜんそくを取り上げ、平成 14 年度の登録状況を検討するとともにぜんそくの重症者の動向、さらには医療意見書についての記載状況について検討した。

B. 研究方法

小慢事業に関して、都道府県から報告された平成 14 年度電子データによる内容について集計・解析した。

C. 結果

ぜんそくの疾患群に登録されたには 5084 名であった。登録人数は 10 年度 8396 人、11 年度 8924 名、12 年度 11934 名、13 年度 9489 名と減少傾向にある。14 年度はさらに減少した。また、記載に関しての項目別の記載率を資料に示した。

D. 考察

ATS-DLD や ISAAC の方法を用いての調査では、本邦では小児の気管支喘息はその増加は少なくなった、またはほぼ停止したと考えられる。それとガイドラインの普及にしたがって重症者が減少しているとかんがえられる。平成 14 年度の登録状況をみてもそれがうかがえる。しかし、登録者中にしめる乳幼児の比率が高く、乳幼児の重症化または治療の不十分さが考えられる。今後の大きな課題である。

一方、登録に際しての医療意見書については、乳児・幼児の比率が高いこともあって、肺機能や採血を要する検査についてはその施行率が低い。また書類作成にあたっての参考書類の整備、記載例の提示も必要であると思われた。なお、本登録のような重症児に限っての貴重は諸外国にも少なく今後とも継続の必要があると考えられた。

ぜんそく(1)

- 平成14年度登録数 5084名
- 男女比 男3098 女1975 不明 11名
- 年齢 乳児 470名、幼児 1821名、学童 1830名、生徒 558名
それ以上 405名

ぜんそく(2) 記載率

- 発作型 99.9%
- 検査所見
IgE 69.7% RAST陽性抗原数61.9%
抹消血Eo 65.0%
喀痰・鼻汁Eo 93.2%

ぜんそく(3) 記載率

- 呼吸機能検査
FEV1.0 13.6% %FEV1.0 13.6%
%PEFR 10.4%
- 気道過敏性 9.5%
- 合併症 94.7%

まとめと注意点

- 乳幼児での登録が多い(45%)。
- 記載の種類について記載率に差がある。
- 発作型、治療点数、ステップについて添付参考書類の参照が必要
- 呼吸機能検査の一般化が望まれる
- 本登録は小児気管支ぜんそくの重症者データベースになりうる。
- ガイドライン等の普及により今後も重症者は減少する可能性があるが、今後も調査が必要である。